

清代北京語文法の再検討

——‘被’, ‘叫’, ‘让’ をめぐって——

今 井 敬 子

目 次

- | | |
|------------------------|--------------------|
| 0. まえがき | 2. 『紅樓夢稿』に見られる書き換え |
| 0.1. 研究の目的と範囲 | 3. 『兒女英雄傳』の受動表現 |
| 0.2. 調査する資料と文献 | 4. む す び |
| 1. 『石头記』と『紅樓夢』の受動表現の差異 | 参考文献リスト |

要 旨

本稿では、現代北京語の成立の経緯をさぐるための調査作業の一環として、受動標識の‘被’, ‘叫’(‘教’)及び‘让’を取り上げ、清代北京語の代表的な文法資料とみなされている四篇の作品の中で、これらの標識がどのような使用状況の下に置かれているかについて調査を行っている。そして、調査の結果、『石头記』から『紅樓夢稿』を経て『紅樓夢』に至る資料の中では、地の文においては‘被’が優勢である状況が固定されているのに対し、会話文では‘被’が徐々に後退し、それに代って‘叫’が優勢になってゆく現象が見られることがわかった。この推移は、現代北京語における状況に接近してゆく過程を表わしており、これらの資料が北京語の系譜に属するものとして価値のあることが再確認される。これに対し『兒女英雄傳』は、一般には『紅樓夢』に続く清代北京語の資料と目されているにもかかわらず、本稿の調査によって、その受動表現が中世的な様相を呈していることがわかった。これは、或いは中世からの語り物の体裁にあわせようとする小説作法によるものであるかもしれない。いずれにせよ、しかし、この作品がこれまでの通説に反し、『紅樓夢』のあとを受ける清代北京語の特徴を必ずしも全面的に備えているものではないことがわかるのである。

0. まえがき

現代中国語の文法組織の中でも受動を表わす文法形式は、複雑な様相を呈しているものの一つと言ってよいであろう。受動構文の標識については、一般に次のように理解されている。

- 1) 書きことばには‘被’が用いられる。
- 2) 話しことばに用いられる複数の受動標識には地理的な分布に顕著な差異が見られ、北方方言では‘叫’, ‘让’などの、使役と受動に両用される標識が受動構文に用いられている

が、南方方言では‘給’などの、授与と受動に両用される標識が用いられている。

3) 受動専用の標識である‘被’は、生きたことばの中では、北方でも東北や北西などの周辺地域でわずかに使用されているに過ぎず、これとても、書きことばからの流入なのかどうか必ずしも厳密な調査によるものではない。

北方方言の基礎の上に成立した現代の中国語では、特に口語となると、たとえば現代北京語のように、上述の標識の中の使役、受動両用型である‘叫’、‘让’が広く用いられている。これについては、一応古くから使用されていた‘被’が、言語発達史の中で‘叫’、‘让’に取って代られた結果生じた状況であると認められているが、その過程を明確に論じた研究はこれまでほとんどなかった。Hashimoto (1986)はその交替について、16世紀ごろから顕著になる北方諸民族（特に満州族）の中原地方侵入によってもたらされた中国語のアルタイ化現象が原因であると述べている。そして、アルタイ諸語の中でも、特に中国語北方方言の話されていた地域に近い所に使われ、話されていた（東から西へ）満州文語、満州語富裕方言、シベエ語、オロチョン語のようなツングース諸語の話し手や、土族語、東郷語のようなモンゴリック諸語の中でも比較的古い形を多く残している言語の話し手のことばに、使役と受動を同一の標識によって表わすもののあることを挙げている。こうした外的要因の他に、使役と受動の概念が相互の交換を可能とするような内的な原理を備えていることも考え得るが、これについては拙文（1986）をご参照頂きたい¹⁾。

0.1. 研究の目的と範囲

本稿では、現代北京語の成立の経緯をさぐるための作業の一環として受動標識の‘被’‘叫’（教）及び‘让’を取り上げ、清代北京語の代表的な資料とみなされている作品の中でこれらの受動標識がどのような使用状況にあるかについて調査し報告する。その調査の結果をもとに、清代北京語諸資料について、各々の資料的価値をも、あわせて論じたい。

0.2. 調査する資料と文献

本稿では次の四篇の作品から例文を収集している。

- ①『脂硯齋重評石頭記』（一、二）曹雪芹・作、北京：文学古籍刊行社、1955年。
- ②『紅樓夢』（全四冊）曹雪芹、高兰墅・作、北京：人民文学出版社、1980年。
- ③『乾隆抄本百廿回紅樓夢稿』曹雪芹・作、上海古籍出版社、1984年。
- ④『兒女英雄伝』文康・作、上海：亜東図書館、1925年。

①は通常「庚辰本」と称されるところの乾隆庚辰の年（1760年）に書かれた80回本の『石頭記』の写本であり、②は高兰墅の続作によると伝えられる後40回を加えた『紅樓夢』の120回本であって、1792年に刊行されたいわゆる「程乙本」を底本としている。また、③は、①が修正された結果②となるまでの過程において書かれた一本であろうと推測されている資料である。これらのうち①、②、③を、本稿においては、①『石頭記』、②『紅樓夢』、③『紅樓夢稿』と簡略化して呼びわけることとする。

最後に挙げた資料④は、1821年乃至1850年頃に書かれたと推測されている小説の活字本であり、上に挙げた②『紅樓夢』の成立との間に30～60年の隔りが認められる。

1. 『石头記』と『紅樓夢』の受動表現の差異

まず最初に『石头記』と、『紅樓夢』の後40回とを比較し、各々に見られる‘被’、‘叫’（教）及び‘让’の使用件数の分布状況を示すと〈表1〉のようになる。〈表1〉の中に示されたNは地の文に受動標識が現われる場合を指し、Cは会話文の場合を指している：

〈表1〉

作品 出現環境 受動標識	『石头記』			『紅樓夢』(後40回)		
	N	C	計	N	C	計
被	70	57	127	57	32	89
叫	1	44	45	6	31	37
教	0	4	4	0	0	0
让	0	0	0	0	0	0

まず、表中の‘被’の欄を横に見てゆくと、『石头記』と『紅樓夢』のどちらも‘被’は地の文に多く用いられているが、会話文においてもかなりの割合を占めていることがわかる。会話文における‘被’のこのような広泛な使用状況は、これらの資料がすべて書きものであることから来る制約を斟酌しても、なお現代中国語の場合とはかなり異っていると認められる。会話文に用いられている‘被’が、その作品に出現する‘被’の総数に対してどの位の割合を占めているかといえば、『石头記』では57例の‘被C’は同作品中の‘被’全体(127例)の44.1%を占め、『紅樓夢』では32例の‘被C’は‘被’の総数89例の35.9%にあたる。このように、‘被’が会話文に用いられる頻度は『石头記』から『紅樓夢』に移るにつれて減じてゆくことがわかる。

次に‘叫’について見ると、『石头記』と『紅樓夢』のどちらの場合も‘叫’は地の文にはごくわずかしか出現せず、会話文中に圧倒的に多く用いられていることがわかる。これは現代中国語における‘叫’の使用状況と符合するものである。更に〈表1〉の中のCの欄を縦に見てゆき、会話文中におけるそれぞれの受動標識の使用状況を比較してみると、『石头記』では‘被’（57例）が‘叫’など他の受動標識よりも多く用いられており、一方、『紅樓夢』では‘被’（32例）と‘叫’（31例）がほぼ同数であることがわかる。〈表1〉にあらわれた以上の状況を総合すると、『石头記』から『紅樓夢』へ移るにしたがって‘被’が会話文中に使用される割合が減少し、それに代って、会話文中に占める‘叫’の比率が増大しているということになる。両作品の間に見られるこのような差異は、それぞれの書き手である曹雪芹と高兰墅の言語背景の違いによるのであらうと先ずは考えることができる。

また、『紅樓夢』の前80回についても調べてみると、そこでの受動標識の使用状況は『石头記』の場合とはかなり異っていることがわかる。すなわち、〈表1〉に示した『石头記』の中の‘被C’57例中の22%にあたる13例が、『紅樓夢』前80回の中の対応する箇所において‘叫’に書きかえられているのである。しかもこのような‘被’から‘叫’への書き換え

が、会話文についてのみ見られるもので、地の文に用いられている‘被’については同様の操作は一切行われていないことは特記されなければならない。その書き換えの行われた13例を以下に挙げると：

- (1) 這会子又被太々看見了送這幾枝花兒與姑娘奶々們(石・7・80)²⁾(今度はまた奥様にみつかってしまって、このお花をお嬢様、若奥様方にお届けするように言われてね。)

→這会子叫嬢太太看見了，叫送這幾枝花兒給姑娘奶奶們去。(紅・7・85)
- (2) 不知怎的被人放了一把邪火～(石・7・80)(どうしてその人の怨みを買うようなことになったのか知らないが～)

→不知怎的叫人放了把邪火～(紅・7・86)
- (3) 人家的孩子都是斯々文々の慣了不見了你這破落戸還被人笑話死了呢(石・7・83)(あちらのお子様方は上品でいらっしゃるので、あなたのようなごろつきは見なれていませんから、【もし会ったら】あちらさんの笑いにされるでしょう。)

→～還叫人家笑話死呢。(紅・7・88)
- (4) 我才到茶來被雪滑倒了失手砸了鐘子(石・8・97)(わたしがお茶を入れてこようととして雪ですべて転び、茶碗を落として割ってしまいました。)

→我才倒茶，叫雪滑倒了，失手砸了鐘子了。(紅・8・104)
- (5) 只得從命依旧被我開了个馬仰人番更不成个体統(石・16・162)(やむなく仰せの通りしましたが、私のせいで人馬もろともひっくり返り、全くみっともない有様になりました。)

→～叫我開了个馬仰人翻，更不成个体統。(紅・16・177)
- (6) 必定是外頭丟掉下來不妨被人揀了去(石・21・231)(きっと外出なさった時に落とされて、誰かに拾われてしまったんでしょう。)

→必定是外頭丟去，掉下來，叫人揀了去了。(紅・21・240)
- (7) 好容易救了上來到底被那木釘把頭碰破了(石・38・433)(やっとのことで救い上げられましたが、木釘に頭をぶつけてしまいました。)

→好容易救上來了，到底叫那木釘把頭碰破了。(紅・38・461)
- (8) 老太々也被風吹病了(石・42・478)(大奥様も風に吹かれたためお体の具合が悪くなりました。)

→老太太也叫風吹病了(紅・42・513)
- (9) 二奶奶若是料差一点兒的早被你們這些奶奶治倒了(石・55・649)(若奥様がもう少し大ざっぱな方だったら、とっくにあんたたちに押え込まれていたでしょうよ。)

→二奶奶要是略差一点兒的，早叫你們這些奶奶們治倒了。(紅・55・702)
- (10) 被我姨媽看見了要告你没告～(石・59・695)(おばに見つかってしまい、おばがあなたを言いつけようとしていたら～)

→叫我姨媽看見了要告没告成～(紅・59・695)
- (11) 正是天地神佛不忍我被小人們誹謗放生此事(石・68・812)(これぞ天地の神、仏がつまらぬ奴らに悪く言われている私を見かねて、こういう事態にもち込んで下さったんです。)

→～天地神仏不^レ忍^レ的叫^レ这些小人們遭^レ塌我，所以才叫我知道了。（紅. 68. 883）

(12) 這会子被^レ人家告^レ我們我又是個没脚蟹（石. 68. 816）（今回人に告訴されて、私は脚をもがれた蟹のようなものよ。）

→這会子叫^レ人告^レ我們，～（紅. 68. 888）

(13) 別胡鬧了被^レ人听^レ見^レ什么意思（石. 77. 943）（でたらめを言わないで下さい。人に聞かれましたらどうします。）

→这是那里的話？叫^レ人听^レ着，什么意思？（紅. 77. 1015）

これらの会話文中の‘被’が『紅樓夢』ではすべて‘叫’に書き換えられているのであるが、それぞれの会話の発話者について調べてみると、特定の方言を言語背景としてもつような限られた人物だけではなく、様々な人物の発話であることがわかる。以下に挙げるのは各例文の発話者である：

鳳姐……………例文番号(5), (8), (11), (12)

襲人……………(4), (13)

周瑞家的……………(1)

周瑞家的女孩儿……………(2)

龍氏……………(3)

湘雲……………(6)

賈母……………(7)

平兒……………(9)

春燕……………(10)

発話者の言語背景に特殊な状況が見られないだけでなく、その他の文構成要素にも、取り上げるべき特殊性が見られるわけではなく、通常の受動構文において、ほぼ‘叫’への書き換えだけが行われているのである。このように、『石頭記』と、『紅樓夢』の前80回との間にも受動表現の差異が見られるのであるが、このことから後者が文法の上でかなり手を加えられた結果できあがっているものであることがわかる。会話文における‘叫’への書き換えは、『紅樓夢』の後40回にみられる会話文中での‘叫’の増加という現象と同質であることから、『紅樓夢』の前80回の中での書き換えは後40回を続作した高兰聖によってなされたものではなかろうかと想像されるのである。結局、『紅樓夢』の前80回は少なくとも受動表現に関しては、曹雪芹の言語特徴が全面的に反映されているとはいいがたいと認めざるを得ない。

朱（1985）は反復疑問構文の‘可VP式’を取り上げて、『紅樓夢』の前80回と後40回との間でその使用状況に差異の見られることを述べているが、その原因を、南京で幼時を過ごした曹雪芹と北京方言の中だけで育った高兰聖との言語背景のちがいによるのではないかと分析している³⁾。しかし、上述したように、『紅樓夢』の前80回には曹雪芹以外の者の手がかなり加えられている形跡が見られるのであって、これをもとに判断すると、朱の調査による前80回と後40回との間の差異には他の要因も加わっていると考えられる余地が存するのであ

る。

このほか、〈表1〉に示されたように、‘叫’と同様に使役、受動両用型である‘让’が、『石头記』と『紅樓夢』のいずれにもただの一例も見られないことが注目に値する。これは、現代北京語における受動標識の使用状況とは異った点の一つとして挙げられるものである。

2. 『紅樓夢稿』に見られる書き換え

前節において、会話文に用いられる受動標識が『石头記』から『紅樓夢』へ移行するに従って‘被’が減少し、‘叫’が増加してゆく傾向の見られることを述べたが、『紅樓夢稿』にはその推移の一過程が明瞭に表わされている。〈表2〉は、『石头記』の中では、‘被’と表示されているにもかかわらず、『紅樓夢』では‘叫’に書き換えられているものが、『紅樓夢稿』の中ではどのように表わされているかを示したものである。表の横軸には、該当する‘被’や‘叫’が出現する作品中の回数が示してある：

〈表2〉

作品中の回数 作品	7	7	7	8	16	21	38	42	55	59	68	68	77
石头記	被	被	被	被	被	被	被	被	被	被	被	被	被
紅樓夢稿	被	被	被	被	被	被		被	被叫	被	叫	被叫	被叫
紅樓夢	叫	叫	叫	叫	叫	叫	叫	叫	叫	叫	叫	叫	叫

〈表2〉の『紅樓夢稿』の欄に〔被叫〕と表示してある箇所は、‘被’が斜線で消され、‘叫’がその横に書き加えられているもので、『紅樓夢稿』の校定者の手によって直されていることが明らかに見てとれる箇所である。また、『紅樓夢稿』の第38回の欄が空白になっているのは、‘被’、‘叫’或いはその他の受動標識がここでは何も用いられていないことを示している。その例文を、『石头記』中の対応する文（前節で挙げた例文(7)）と並べて示すと：

(7) 好容易救了上来到底被那木釘把頭碰破了（石. 38. 433）

(7') 好容易救了上来到底那木釘把頭碰破了（稿. 38. 446）

例文(7')のように受動標識を用いなくても文意は通じるが、通常は、例文(7)のように受動標識を用いた方が文意を理解しやすいことから考えると、『紅樓夢稿』における例(7')は単に受動標識を書き落としたにすぎないのではあるまいかとも考えられる。

〈表2〉を見ると、『紅樓夢稿』では、作品中の回数番号が若い部分においては『石头記』のままに‘被’が用いられているが、回数が進むにつれて‘被’が‘叫’に書き換えられる傾向が表われていることがわかる。これは、或いはこの『紅樓夢稿』の校定者が、『石头記』を読み進むにつれて現実の北京語と合わないスタイルに段々耐えられなくなり、とうとう手を加えて‘叫’に書き換えるに至ったのではあるまいかとも推測できる。このように前半の

部分では『石头記』と同一の文法表現を保留しつつ、後半の部分では『紅樓夢』に接近する様相を見せていることから判断して、『紅樓夢稿』が、『石头記』から『紅樓夢』に至るまでの途中の一過程に存在する資料であるに過ぎないことが、語学的にも確認されるのである。私は『紅樓夢稿』と『紅樓夢』の各々の後40回の部分についても調査を行ってみたが、その結果、両者の相互に対応する箇所には同一の受動標識が用いられていることがわかった。つまり後40回については、『紅樓夢稿』から『紅樓夢』への受動標識の書きかえはなされていないわけである。したがって、前80回の『紅樓夢』においては、『紅樓夢稿』に見られる受動標識の書き換えを、作品の前に戻って改めてやり直したものとも考えられ、このことから、『紅樓夢稿』と『紅樓夢』とが同一の人物、或いは言語背景を同じくする複数の人物によって書かれている可能性のあることがわかるのである。

このほかに『紅樓夢稿』の中では、‘教’から‘叫’（叫）への書き換えも行われている。前節に示した〈表1〉を見ると、『石头記』の会話文中に‘教’が4例用いられているが、これらのうちの3例が、『紅樓夢稿』の中では‘叫’（叫）に書き換えられている。使役受動標識として用いられる‘教’と‘叫’は、本来、使役の意を表わす jiào ということばを漢字表記したものにすぎないと考えられるが、周知のように、‘教’は第一声（陰平声）と第四声（去声）の二つの声調で読まれるのでまぎらわしく、そのため常に第四声で読まれる‘叫’が多く用いられるようになったのではないかと推測される。‘教’は『石头記』の中でもたった4例しか見られず、この時期には既に余り用いられていなかったようであるが、『紅樓夢稿』では、更に徹底して‘叫’（叫）への書き換えを行っているわけである。尚、4例中の残りの1例は、『紅樓夢稿』の中では意外にも‘被’に書き換えられており、それが『紅樓夢』の中では更に‘叫’に書き直されている。次にその例文を示すと：

- (4) 這個臉上是前日打圍在鉄網山教免鶻梢一翅勝（石・26・299）（この顔〔の傷〕は、先日鉄鋼山で獵をしていて鶻に羽で一打ちされたものなんです。）
 → 這臉上是前日打圍在鉄網山被免鶻梢了一翅勝（稿・26・313）
 → 這臉上是前日打圍，在鉄网山叫免鶻梢了一翅勝。（紅・26・310）

この会話文の発話者は馮紫英であり、薛幡との会話の中的一条である。通常の会話文の中に用いられているのになぜ‘被’に書き換えられたのかは明らかでないが、先に〈表1〉に示したように、当時は‘被’もなお会話文中に少なからず用いられていたこと、そして同時に‘叫’が優勢になりつつあったという転換期の言語状況が、この三点の資料の間でのめまぐるしい書き換えを生じさせたのではないだろうか。又、かりに話しことばでは‘叫’の用法が確立しつつあったとしても、書きことばからの流入ということが考えられる。何分とも孤立している例なので確かな推測はむずかしいが、おそらく、受動標識に‘被’を用いる書きことばの標準が当時でも十分確立していて、その言い方が不用意に紛れ込んだのではないかと考えられるのである。

以上、第1節及び第2節で明らかになったように、『石头記』から『紅樓夢稿』を経て『紅樓夢』に至るまでの会話文における‘被’から‘叫’への推移は、現代中国語の受動表現の様相に徐々に接近していく経過を表わしている。したがって、これらの資料が少なくと

も受動表現に関しては、現代北京語の系譜を知るための十分な内容を提供していることを改めて確認できるのである。

3. 『兒女英雄傳』の受動表現

清代北京語の文法研究資料であって『紅樓夢』に後続するものとしては、通常『兒女英雄傳』が取り上げられる。作者の文康は、『紅樓夢』の作者の曹雪芹と同様に旗人であるところからも、両作品の基づく言語は共通する部分が多いと言われ、北京語の系譜を語る上で、『紅樓夢』と現代北京語の諸資料とを結ぶ中間に位置するものが『兒女英雄傳』であると通常理解されている。太田（1974）は両作品の言語を比較し、特に語彙については、『紅樓夢』と『兒女英雄傳』の間に時代の差による歴然たる違いがあることを強調している⁴⁾。太田によると『紅樓夢』に見える古い語彙は『兒女英雄傳』では用いられていないものが多く、しかも後者には新しい語彙が増加していて、現代北京語に接近する傾向が見られるという。しかしながら、受動表現について調査を行ってみると、予想に反した状況を呈していることがわかった。次に示す〈表3〉は、『兒女英雄傳』に見られる‘被’、‘叫’（‘教’）及び‘让’の分布状況をまとめたものである：

〈表3〉

出現環境 受動標識	N	C	計
被	84	53	137
叫	2	9	11
教	0	1	1
让	0	0	0

〈表3〉からわかるように、‘叫’は全体的にきわめてわずかしか用いられていない。‘叫’の総数11例は、‘被’の総数137例の一割にも及ばない。また、表中のC欄を縦に見てゆくと会話文に用いられる標識では‘被’が圧倒的に多いことがわかり、‘叫’の9例はC欄に挙げられた受動標識の総数のわずか13.6%を占めているにすぎない。このような‘叫’の使用状況は、第1、第2節において明らかになったような『石头記』など三点の資料に見られる状況とは非常に隔っている。『石头記』から『紅樓夢』に至る間

に見られる、会話文における受動標識の‘被’から‘叫’への推移現象が、『兒女英雄傳』の中で継承されていないばかりか、三点の資料の中で最も中世的な様相を呈している『石头記』に比べてもなお、『兒女英雄傳』の方が‘叫’の使用頻度が低いのである。『兒女英雄傳』に出現する会話文中の‘叫’の用例の全9例を以下に挙げると：

- (15) 是呀，真真的，我也是叫你们唬糊塗了！(12. 12)（そうだね，ほんとうだよ。お前たちにびっくりさせられて，私は頭がおかしくなったんだよ。）
- (16) 好好儿的，叫人瞧着，这是怎麼了？(19. 2)（何ともないのに，人に見られてどうなると思っているの。）
- (17) 除了我們爺儿四個，連個鬼也不叫聽見。(19. 19)（私たち4人のほかには，鬼にだって聞かれちゃいない。）
- (18) 連你那拉青屎的根子都叫人抖翻出来了。(20. 27)（あなたが粗相をしたことまでぶ

ちまけられてしまったんですもの。)

- (19) 到了后来，索興連你的関防盆兒都叫人家汕了爪兒了。(26. 39) (あとになって、あなたのおまるまであの人に手をつけられてしまったのよ。)
- (20) 自從去年見了他們，算叫他們把我裝在罈子裏，～(27. 16) (去年皆さんにお会いして以来、私だけつんぼさじきに置かれて～)
- (21) 到底也知道我是叫人逼的没法兒了。(27. 16) (結局あの人たちに無理強いされてどうしようもなくなったんだわ。)
- (22) 娘，你怎麼這時候兒才來？只瞧……這裡叫他們鬧的……這個……(27. 21) (お母さん、どうしてこんな時間においでになったの。まあ、あの人たちのせいで…あの…)
- (23) 不想我的乾女兒沒得認成，倒把個親女兒叫弟夫人拐了去了。(32. 30) (義理の娘として〔金鳳を〕認めぬうちに、反対に実の娘をあんたの奥さんにとられてしまったとは。)

上掲の会話文の発話者は次の複数の人物であり、これらの会話が特定の人物の発話ではないことがわかる：

- 褚大娘子……例文番号(16), (17), (18)
 玉鳳……(20), (21), (22)
 金鳳……(19)
 安太太……(15)
 鄧九公……(23)

太田(1974)には、『兒女英雄傳』の中の会話は例外を除きすべて北京語であると言ってよいと述べられている反面、中世の講師の口調を模倣したところが多いとも指摘されている⁵⁾。〈表3〉にあらわされた状況から判断すると、受動表現については後者の特徴が強く反映しているということなのであろうか⁶⁾。この作品の中の受動表現の状況が、中世からの語り物の体裁に合わせようとする小説作法によるものであるとしたら、この小説が基づくところの言語(当時の北京語)そのものの問題ではないかもしれない。しかし、いずれにせよ、この作品がこれまでの通説に反し、『紅樓夢』のあとをうける清代北京語の特徴を必ずしも全面的に備えているものではないことが、受動表現の調査を通して確認されるのである。

このほかに、〈表3〉において示されたように受動標識の‘让’が、『石头記』など三点の資料ばかりでなく『兒女英雄傳』の中にも1例も用いられていないことが注目される。‘叫’と‘让’は現代中国語の中では、共に使役と受動の両用性を備えた標識として位置づけられているにもかかわらず、両者の受動標識としての使用は時を同じくして始まったのではないようである。太田(1970)によると、清末の社会小説『小額』の中に‘让’の受動用法が多く見られるというが⁷⁾、‘让’についての調査、研究は今後の課題としたい。

4. む す び

本稿の調査の結果、『石头記』から『紅樓夢稿』を経て『紅樓夢』に至る資料に見られる

受動表現に関しては、地の文では‘被’が優勢であるという状況が固定しているのに対し、会話文では‘被’が後退し、それに代って‘叫’が優勢になってゆく状況の変容があることがわかった。これは現代北京語の状況に接近してゆく過程を表わしており、これらの資料の延長線上に現代北京語の受動表現が存在することが改めて確認される。これに対し、『兒女英雄傳』においては、会話文の中でさえ‘被’が圧倒的に優勢であり、‘叫’の使用度はきわめて低いという状況が見られた。このことから『兒女英雄傳』の言語は、『紅樓夢』のあとを受ける清代北京語の特徴を必ずしも全面的には備えていないことが明らかになった。

また、‘叫’と同様に使役、受動両用型である‘让’の受動用法が、四点の資料のいずれにも全く見られないことがわかった。本来使役標識として用いられてきた‘让’が、後に受動用法を獲得したのは‘叫’の影響を受けたためではないかと考えることができる。そうであるなら、‘让’の受動用法は‘叫’のそれより遅れて発生したことになり、したがって、本稿で扱った資料にはまだ出現していないが、太田のいうように清末の小説には見られるのであろうと考えられる。

註

- 1) 今井 (1986), pp. 108~109.
- 2) 石. 7. 80. は『石头記』の7回, 80頁を表わす。また、『紅樓夢』は紅、『紅樓夢稿』は稿とそれぞれ略称することとする。作品中の回数と頁数の表し方は以下同様。
- 3) 朱 (1985), pp. 18~19. なお、朱の用いている版本は、程乙本に基づく『紅樓夢』(人民文学出版社, 1955)である。
- 4) 太田 (1974), p. 155.
- 5) 太田 (1974), p. 142, 143.
- 6) 向 (1958)によると、中世の語り物である《水滸》に見られる受動標識には‘被’と‘吃’があるが、‘被’が圧倒的に多く用いられているという。p. 94.
- 7) 太田 (1970), p. 15.

参 考 文 献

- HASHIMOTO, Mantaro J. 1986. "The structure and typology of the Chinese passive construction." To appear in *Typological Studies in Language: Passive and Voicing*. Philadelphia: John Benjamins.
- 今井敬子 1986. 「『紅樓夢』の受動表現」, 『中国語学』第233号, pp. 101~112.
- 太田辰夫 1958. 『中国語歴史文法』東京: 江南書院, 再版: 京都: 朋友書店, 1985年.
- 1970. 「《小額》の語法と語彙」(上), 『神戸外大論叢』第21巻第3号, pp. 5~18.
- 1974. 「『兒女英雄傳』の言語」, 『日本中国学会報』第26集, pp. 141~156.
- 王 力 1957. 「漢語被動式的发展」, 『語言学論叢』第一輯, pp. 1~16.
- 1958. 『漢語史稿』(中冊) 北京: 中华书局(再版, 1980年)
- 向 熹 1958. 「《水滸》中の“把”字句, “将”字句和“被”字句」, 『語言学論叢』第2輯, pp. 84~99.
- 朱 德 熙 1985. 「漢語方言里的两种反复問句」, 『中国語文』第一号, pp. 1~20.

A REEXAMINATION OF THE GRAMMATICAL SYSTEM OF PEKINESE
DURING THE QING DYNASTYWith Special Reference to the Passive Markers *bei*, *jiao* and *rang*Keiko IMAI
(Shinshuu University)

This present study examines usages of the three passive markers *bei*, *jiao* and *rang* in the four pieces of well-known Pekinese writings during the Qing dynasty, the *Shitou Ji* [*The Story of a Stone*] by Cao Xue-qin, the draft and published versions of the *Honglou Meng* [*A Dream in the Red Chambers*] by Cao Xue-qin and, possibly, Gao Lan-shu, and the *Ernyu Yingxiong Zhuan* [*A Story of a Woman Hero*] by Wen Kang, in an attempt to establish the grammatical history of modern Pekinese. In the narrative parts of the first three writings, uses of the passive markers are consistently dominated by *bei*, while in the colloquial parts, uses of *bei* is subsequently substituted for those of *jiao*. We understand that this reflects the transition of the passive marker in Pekinese from the former *bei* to the later *jiao* and the formation of the dominant use of *jiao* for passive in modern Pekinese. Quite contrary to this tendency of the increased uses for *jiao*, mainly *bei* is found in the *Ernyu Yingxiong Zhuan*, even though this novel was written after the *Honglou Meng*. The retained uses of *bei* could be due to the fact that the *Ernyu Yingxiong Zhuan* was written with the unique style of the story tellers since the medieval period of China, and does not necessarily mean that the language this novel was based on or the language the author Wen Kang spoke was more archaic than those of the *Shitou Ji* or *Honglou Meng*. Yet, the language reflected in the *Ernyu Yingxiong Zhuan* does not necessarily represent the language which succeeds that of the *Shitou Ji* or *Honglou Meng* in the history of Pekinese as it is normally and widely assumed to be. Practically no use of *rang* was found in these four writings. We thus have to conclude that the use of *rang* is a fairly new phenomenon in the history of Pekinese, even though *rang* is regarded as a pure Pekinese marker and its use is seldom reported in the dialectal surveys of northern Chinese dialects.